

■鈴木其一 絵師。江戸琳派の祖酒井抱一の弟子で後継者。都会的洗練化と理知的装飾性で近代日本画の先駆者とみなされる。
すずききいつ
写楽・・・1795＝江戸中橋で、近江出身の紫染めの元祖紺屋の息子に生まれる。西村氏(山本氏)、諱は元長、字は子淵。出自においても、京都の呉服商雁金屋出身の尾形光琳に連なる家で、流行する江戸紫の美意識に囲まれて育ち、_子供の中から酒井抱一に弟子入り、

いざノ来航・1804＝9歳：

浮世床・・・1813＝18歳：_内弟子になって本格修行を始める。抱一の付き人で仕事を任されるほど優秀な兄弟子鈴木蟬潭がいたが、杉田玄白没・1817＝22歳：_狂犬病で急死。抱一の計らいで蟬潭の姉りと結婚、鈴木家の家督を継いで、実質的に弟子の筆頭になるとともに、抱一の居所(雨華庵)(根岸)のすぐ近くに住んで、師の身の回りの世話をしながら修行、以後、生涯この近くを離れず、

水野忠成老中1818＝23歳：養父蟬潭の名跡養子願には幕臣水野勝之助の家来、飯田藤右衛門厄介の甥で蟬潭母方の遠縁西村為三郎として武士階級で登場し、年齢も23歳、結婚相手も妹になっており、その可能性が高いとみらる(姉と結婚すると義兄になるため、弟の養子にはなれない)。_其一は号で、のちに通称にも使用、別号に?々、菁々、必庵、鋤雲、祝琳斎、為三堂、鶯巢などがあり、年記がある其一の作品は少ないが、落款の変遷から画風展開を追うのが普通である。抱一在世中は、抱一から譲られた号である“庭拍子”，または“其一筆”とだけ記す草書落款が多く、画風準備期とされる。しばしば師の代筆を担当したらしく、抱一作品の中には其一筆と酷似した物も見られるが、其一の作品として確実なのは「蓮に蛙図」で、すでに洒脱で三原色の特徴が現れ、何度も引き直した木筆の跡が真率な制作態度を示している。抱一からは、茶道や俳諧も学び、“鶯巢”の俳号をもち、亀田鵬斎や大田南畝らと交わり、彼らの讃をもつ初期作品も少なくない。

膝栗毛終・・・1822＝27歳：_シボノ来日・1823＝28歳：長男守一が誕生。
異国船打払令1825＝30歳：_西村貌庵が著し抱一が序を寄せた「花街漫録」の挿絵を描いており、他にも10点ほどの版本挿絵がある。
・・・1826＝31歳：この年には死去した鵬斎賛のある「朝顔図」、
シボノ事件・1828＝33歳：これ以前、抱一自身の作品と見まがうほどの、抱一賛のある「文読む遊女図」。_師抱一が死去、
シボノ追放・1829＝34歳：姫路藩士として通常の勤務に戻るのが通例なところ、家禄を返上せず_一代画師となった。同時に剃髪し、
富嶽三十六景1831＝36歳：「山水図」。同時期と思われる「宮女奏楽図」、
鼠小僧磔・・・1832＝37歳：5人扶持・絵具料5両を受けていたが、この年、酒井家19代忠学(抱一の兄忠以の孫)が將軍家育の娘喜代姫と結婚したのを機に、絵具料を改定され、9人扶持となり、その後も喜代姫に厚遇される。_「雪月花三美人図」「群鶴図屏風」、花と虫を組み合わせる新しい感覚の「蝶に芍薬図」、現在不明になっている「柿図屏風」までが、草体落款時代で、画風準備期とみなせる。

天保大飢饉始1833＝38歳：_京都土佐家への絵画修業を名目に休暇を申し出て西遊、京都、奈良を中心に大宰府まで長期旅行、この時の日記「癸巳西遊日記」が残されており、風景スケッチや古画の縮図などが描かれ、帰府すると、「詩経」小雅から‘快いさま’を意味する落款“カイ(口編に會)々”に改め、師の影響を脱し独自の画風へ転換していく。
・・・1836＝41歳：次男誠一が誕生。ほか、4女に恵まれる。_「紅叢紫ロク(竹冠に磔)」に挿絵を描いたのを皮切りに、
大塩平八郎乱1837＝42歳：無款だが箱書から其一の作だとわかる_「河合寸翁像」。「柳花集」に挿絵を描く。
この間、_大店の蠟油問屋松澤金三郎(石居)が最大のパトロンになり、多数の書状が残っていて、画料、鑑定、画材の入手など絵に関するものだけでなく、好物を貰って酩酊したことなど、生活ぶりもいっきと伝えるものになっている。「漁樵図屏風」「風神雷神図」、

勧進帳初演・1840＝45歳：
天保改革始・1841＝46歳：_江戸後期の絵馬として最も優れる「迦陵頻図絵馬」を浅草寺に奉納、これと同時期とみられる、最大のパトロンだった松澤家孫八の家に伝来した「夏秋溪流図屏風」(2020年重要文化財指定、根津美術館)、
天保改革弾圧1842＝47歳：「広益諸家人名録」には、息子守一の名が記されていて、この頃までに、既に家督を譲っていたのではないかと推定されているが、当時の人名録には当主だけではなく隠居、兄弟、子女も掲載される例は多数あり、別の事情により選外になったとみる向きもある。この前後の、_「白椿に薄図屏風」は、この時期の最高傑作であろう。同工異曲の「芒野図屏風」「萩月図襖」、
順天堂始・・・1843＝48歳：「百鳥百獸図」。「秋草図」から「蔬菜群虫図」に至る、一連の植物図はまさにボタニカルアートと言える。
天保改革終・1844＝49歳：_*その他、忍藩の「松平忠国分限帳」に御勝手御用達町年寄格との記載があり、パトロンの一人と思われる原口長兵衛が奉納した「神功皇后伝図絵馬」(行田八幡神社)などの傑作があり、カイ(口編に會)々落款時代、画風高揚期とみなせる。この頃からは、“菁々其一”と号を改めた菁々落款に変わる。“菁々”も「詩経」小雅にあり、‘盛んなさま’を指し、転じて人材を育成することを意味する。光琳の号“青々”も踏まえたもので、師抱一を飛び越えて光琳を射撃としつつ、次なる段階に進み、自ら後進を育てようと目論む意欲が窺える。

阿部正弘首座1845＝50歳：_その最初の「三十六歌仙図」(出光美術館)には、光琳への明確な思慕が見られ、伝統回帰に入っていく。
孝明天皇・・・1846＝51歳：この間出版されてきた抱一作「光琳百図」の版本が焼けてしまったため、それを複製して再出版。その制作過程における、宗達や光琳作品の図様や構成法の再学習は、この後の画風に影響を与えたと見られる。

北斎没・・・1849＝54歳：
国定忠治磔・1850＝55歳：この頃、_「梅椿図屏風(Flowering Plum and Camellia)」(ホノルル美術館所)、「朝顔図屏風」(メトロポリタン美術館)など、化政時代の園芸ブームに対応する植物図が多数、
尊徳報徳論・1851＝56歳：「翁面図絵馬」(成田山新勝寺)、
万次郎帰国・1852＝57歳：「双鶴春秋花卉図」(板橋区立美術館)、
ペリー来航・1853＝58歳：
開国開港・・・1854＝59歳：_傑作「四季花鳥図屏風」(東京黎明アートルーム)、同工異曲の「四季花木図屏風」(出光美術館)に光琳理解、
安政大地震・1855＝60歳：_「竹鍾馗図」、
松下村塾・・・1856＝61歳：_「菊慈童図」、

その作風は再び琳派の伝統に回帰する一方で、其一の個性的造形性が更に純化する傾向が混在したまま完成度を高め、ある種の幻想的な画趣を帯びるようになり、菁々落款時代の画風円熟期とみなせ、琳派は其一によって完結した。「Reeds and Cranes」(デトロイト美術館)、「菊図屏風」(ボストン美術館)、図案化著しく抱一とは異なる美意識の「群鶴図屏風」(エツコ&ジョー・プライスコレクション)、「聖観音図」(ミネアポリス美術館)、「吉原・品川図」(インディアナポリス美術館)、「三十六歌仙図」(大英博物館)など、多くが海外の有名美術館に所蔵されている。その他、円山応挙に関心をもった写実的な絵画や、風俗画も描いて、晩年には工房作とおぼしき凡庸な作品が少なからず残り、師抱一と同様、弟子に代作させたと見られるが、喜代姫の厚遇されて、酒井家の医師格、つまり御用絵師となり別に30人扶持を賜ったとする説もある。
蕃書調所・・・1857＝62歳：次女お清が絵師河鍋曉斎と結婚。其一の長女が、曉斎の父と同じ御茶の水定火消の与力海津某に嫁いだ縁とされる、本来の画域以外にも関心を示す姿勢を持っていたことが共通する。
五ヶ国条約・1858＝63歳：おそらく、歌川広重と同様、_当時流行したコレラにより、没した。浄土宗の浅草松葉町正法寺に葬られたが、同寺は関東大震災で中野区沼袋に移転し、其一の墓もそこに現存している。
雅趣豊かな抱一の作風とは対照的に、硬質で野卑とも言うべき感覚を盛り込んだ其一の作品は、長く国内の評価が低迷し、作品の流失と研究の立ち遅れを余儀なくされたが、近年の所謂“奇想の絵師”達の評価見直しが進むに連れて、琳派史上に異彩を放つ絵師として注目を集めつつある。2008年に東京国立博物館で開かれた「大琳派展」では、宗達・光琳・抱一に並んで其一も大きく取り上げられ、琳派第4の大家として認知されつつある。

Wikipedia「鈴木其一」、河野元昭「鈴木其一 琳派を超えた異才」、